

大学教育学会第31回大会【 首都大学東京南大沢キャンパス1号館104教室;2009年6月7日(日)】

大学生活への適応に関する課題 ～入学半年後の状況に着目して～

樋口 健

(Benesse教育研究開発センター)

はじめに

- ベネッセコーポレーションでは、2008年10月上旬に全国の大学生（4,070人）を対象としたアンケート「大学生の学生・生活に関する意識・実態調査」を実施（自主研究）。
- 本報告はそのデータを利用した分析結果。
- 周知のように、初年次教育が、その重要性が叫ばれ実施されて久しく、さら、高大接続が課題としさまざまな角度からの検討がなされている。
- こうした状況の中で、本研究では特に1年生を取り上げ（対象は1,017人）た。彼らの学習・生活への適応に影響を与える諸要因を分析することで、大学生初期の学習と生活を充実させるための課題を考察したもの。

大学生の学習・生活実態調査

- **ベネッセ教育研究開発センター実施**
- **調査方法** **インターネット調査**
- **対象** **大学1～4年生**
- **調査時期** **2008年10月上旬**
- **有効回答数** **4,070名**
- **本分析の利用データ**
 －1年生1,017名

主な調査内容

A) 高校までの学習実態や意識との関連

- ・高校までの学習の実態
- ・中・高での選抜の有無、大学入試に関する項目

B) 大学生の学習・生活等の行動実態

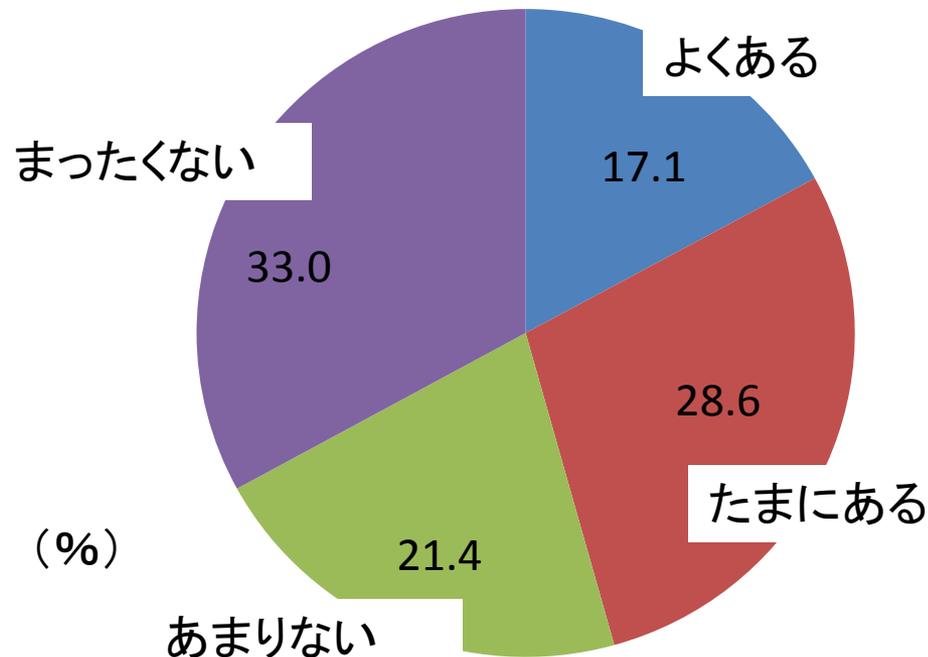
- ・大学での学習・生活実態
- ・大学生活で身についたこと
- ・社会観、就職観などの意識



いくらか話題を呼んだデータ

あなたは、現在の大学生活の中で、次のように思うことはありますか？

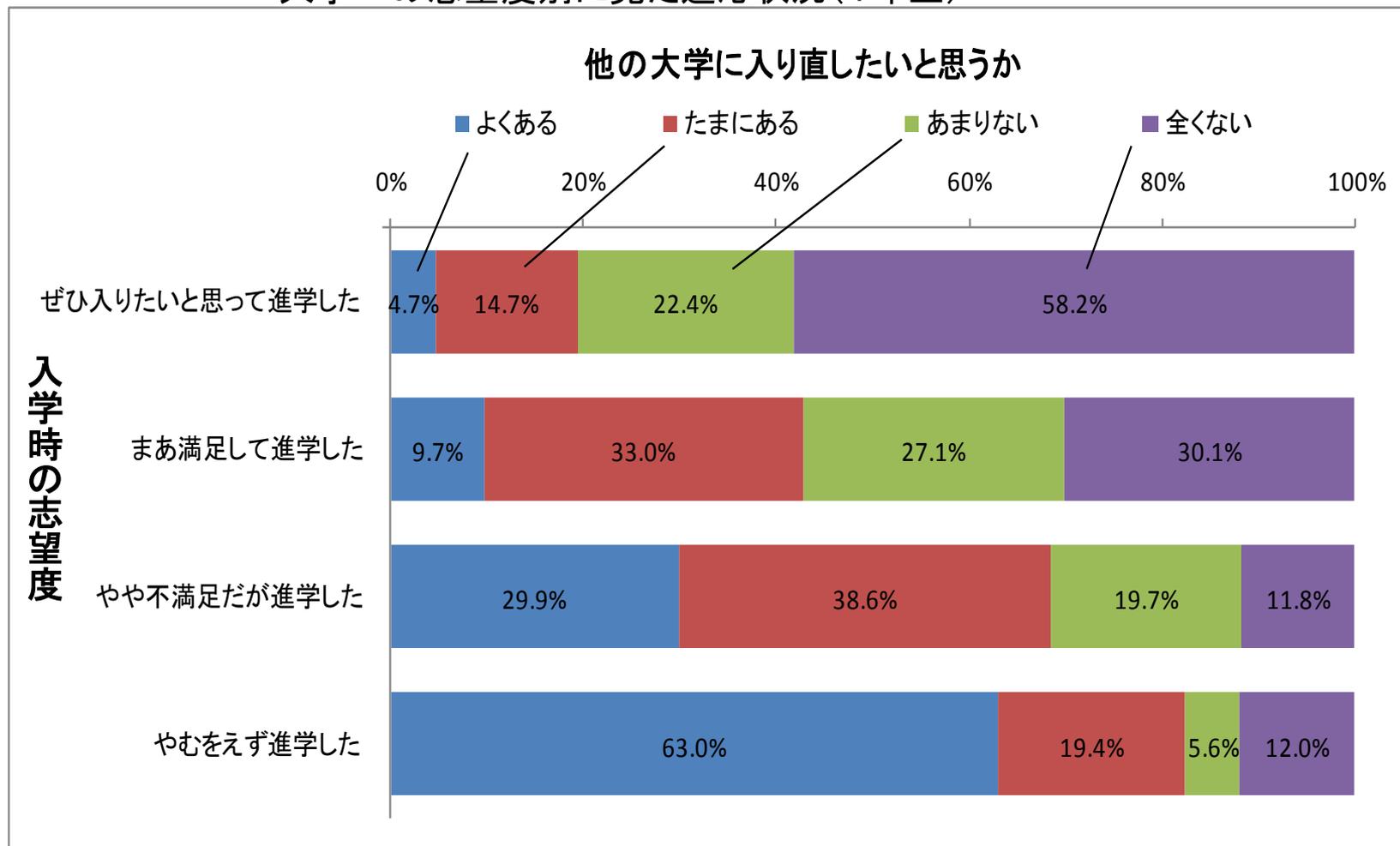
「他の大学に入り直したい」



大学への適応は入学時の志望度に強く規定

その一方で、10か月で入学段階の満足から「他に入り直したい」との不適応に陥った者も4割。逆に入学段階で不満を持っていても再入学意向が「全くない」者も2割。

大学への志望度別に見た適応状況(1年生)



課題設定

大学入学時の志望度と大学入学10か月後の適応度は、大きく相関する。

その一方で、変化もしている。

ーその変化(満足→不適応、不満→適応)あるいは、非変化(満足、不満足の定着、強化)は何に関連して起こるのか？

ーその要因が分かれば、大学1年生の大学生活への円滑な定着を促すためのヒントが得られるのではないか？その考察。

分析の枠組み

入学時の志望度と半年後の適応度による分析対象の分類

半年後の大学適応度・高

【 再入学したいと思うことが、あまりない+まったくない 】

入学時の志望度・低
【 やや不満+やむをえず 】

志望度低⇒適応度高
「これでも、いいか(-+)」

5.8%

志望度高⇒適応度高
「やっぱり正解(++)」

51.8%

志望度低⇒適応度低
「ますます不満(--)」

17.3%

志望度高⇒適応度低
「なんだか、がっかり(+-)」

25.1%

入学時の志望度・高
【 ぜひ入りたい+まあ満足 】

半年後の大学適応度・低

【 再入学したいと思うことが、たまに+よくある 】

課題設定

志望度高⇒適応度高「入って正解(+ +)」

志望度高⇒適応度低「なんだか、がっかり(+ -)」

志望度低⇒適応度高「ここでも、いいか(- +)」

志望度低⇒適応度低「ますます不満(- -)」

①どんな人たち
か？

各層の
属性によ
る分析

②この変化はなぜ起き
る？

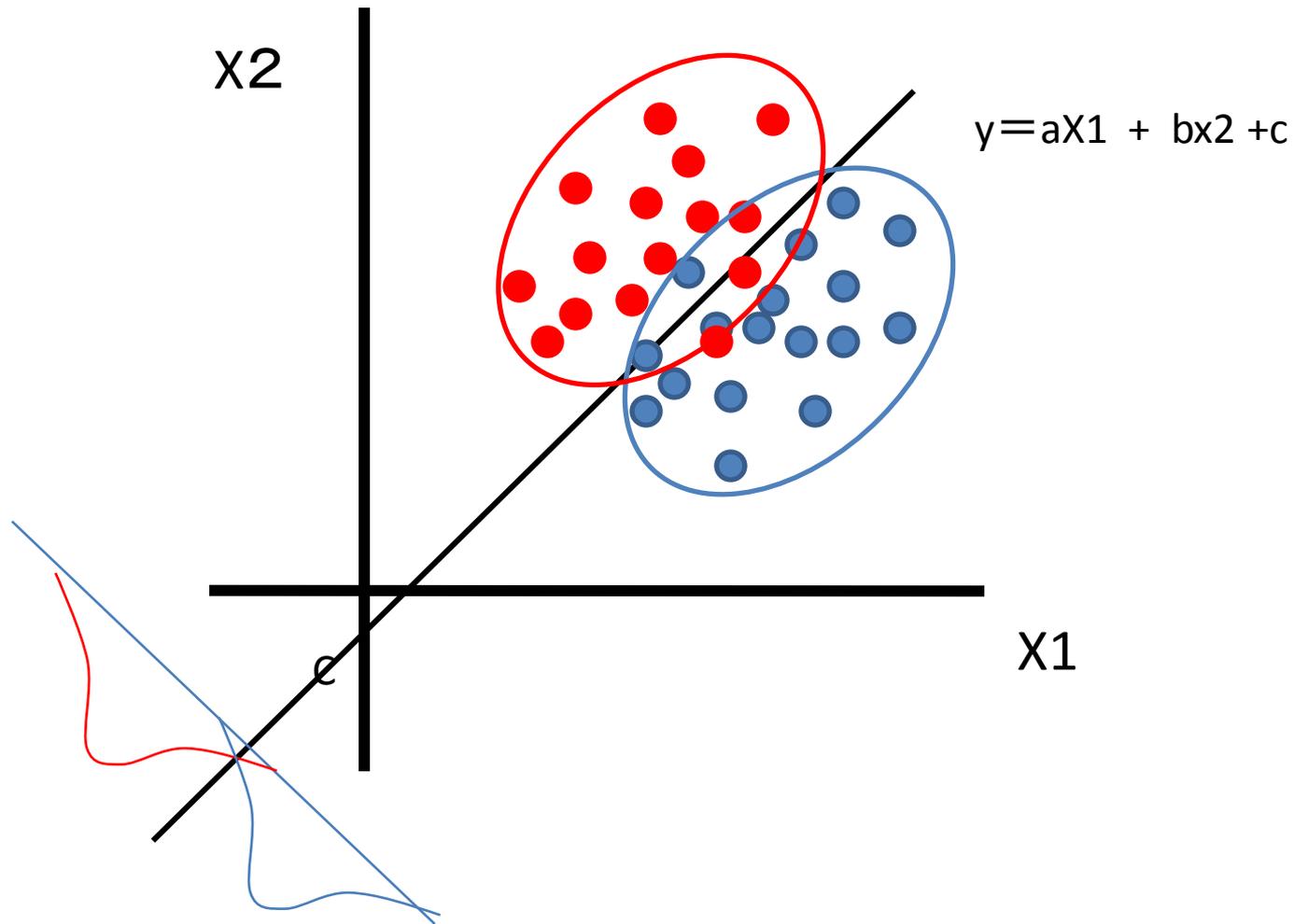
入学後変化と関連のある要因の予想

■判別分析を利用し、以下の要因との関連性を把握。

- ・大学選択時の重視点(入学前)
- ・入学後の授業経験(入学後の環境)
- ・入学後に力を入れたこと、授業への取り組み(自分自身)

判別分析のイメージ

判別分析とは、標本がある特性を持つ群に所属するか否か(たとえば「がんか否か」)を推定する統計手法。判別にあたって利用した変数(要因)の係数の大小により、関連性の強さを見極めることができる。



1 属性等による分析(主なもの)

国立の満足度定着が高い。

	志望・高⇒ 適応・高	志望・高⇒ 適応・低	志望・低⇒ 適応・高	志望・低⇒ 適応・低
国立	62.3%	21.8%	4.8%	11.1%
公立	53.0%	28.8%	1.5%	16.7%
私立	47.9%	25.9%	6.6%	19.6%

P<0.005

1 属性等による分析(主なもの)

- 推薦・AOは、入学後の満足度を高めもするし、低めもしている。
- センター入試は不満を生みやすい？

	志望・高⇒ 適応・高	志望・高⇒ 適応・低	志望・低⇒ 適応・高	志望・低⇒ 適応・低
一般入試	50.3%	23.8%	6.7%	19.3%
センター入試	37.2%	25.6%	5.4%	31.8%
推薦・AO入試	59.6%	28.3%	3.9%	8.1%

P<0.001

1 属性等による分析(主なもの)

大学への不満足と一人暮らしの孤独が、共鳴、増幅しあうのではないか？

	志望・高⇒ 適応・高	志望・高⇒適 応・低	志望・低⇒ 適応・高	志望・低⇒ 適応・低
自宅	53.8%	24.3%	6.5%	15.4%
一人暮らし	47.4%	24.8%	4.6%	23.2%

P<0.001

判別分析による 入学後変化と関連のある要因の検討

- ・大学選択時の重視点(入学前)
- ・入学後の授業経験(入学後の環境)
- ・入学後に力を入れたこと、授業への取り組み(自分自身)

入学後の変化と関連ある要因の想定①

(説明変数; 大学選択時の重視点)

「志望・高⇒適応・高」層と「志望・高⇒適応・低」層、及び「志望・低⇒適応・高」と「志望・低⇒適応・低」を分ける要因について大学選択時の重視点を説明変数として判別分析を行った。各カテゴリ毎に判別係数を上位3位まで絶対値で提示。

志望・高⇒ 適応・高	キャンパスライフが楽しそうなこと	0.752	志望・低⇒ 適応・高	興味のある学問分野があること	0.422
	興味のある学問分野があること	0.236		自宅から通えること	0.330
	入試難易度が自分に合っていること	0.202		キャンパスライフが楽しそうなこと	0.271
志望・高⇒ 適応・低	先生のすすめ	0.336	志望・低⇒ 適応・低	試験日や試験会場が多く、受験しやすいこと	0.482
	都会にあること	0.283		キャンパスの雰囲気が良いこと	0.470
	世間的に大学名が知られていること	0.241		親元を離れられること	0.421

入学後の変化と関連ある要因の想定②

(説明変数;入学後力を入れたこと)

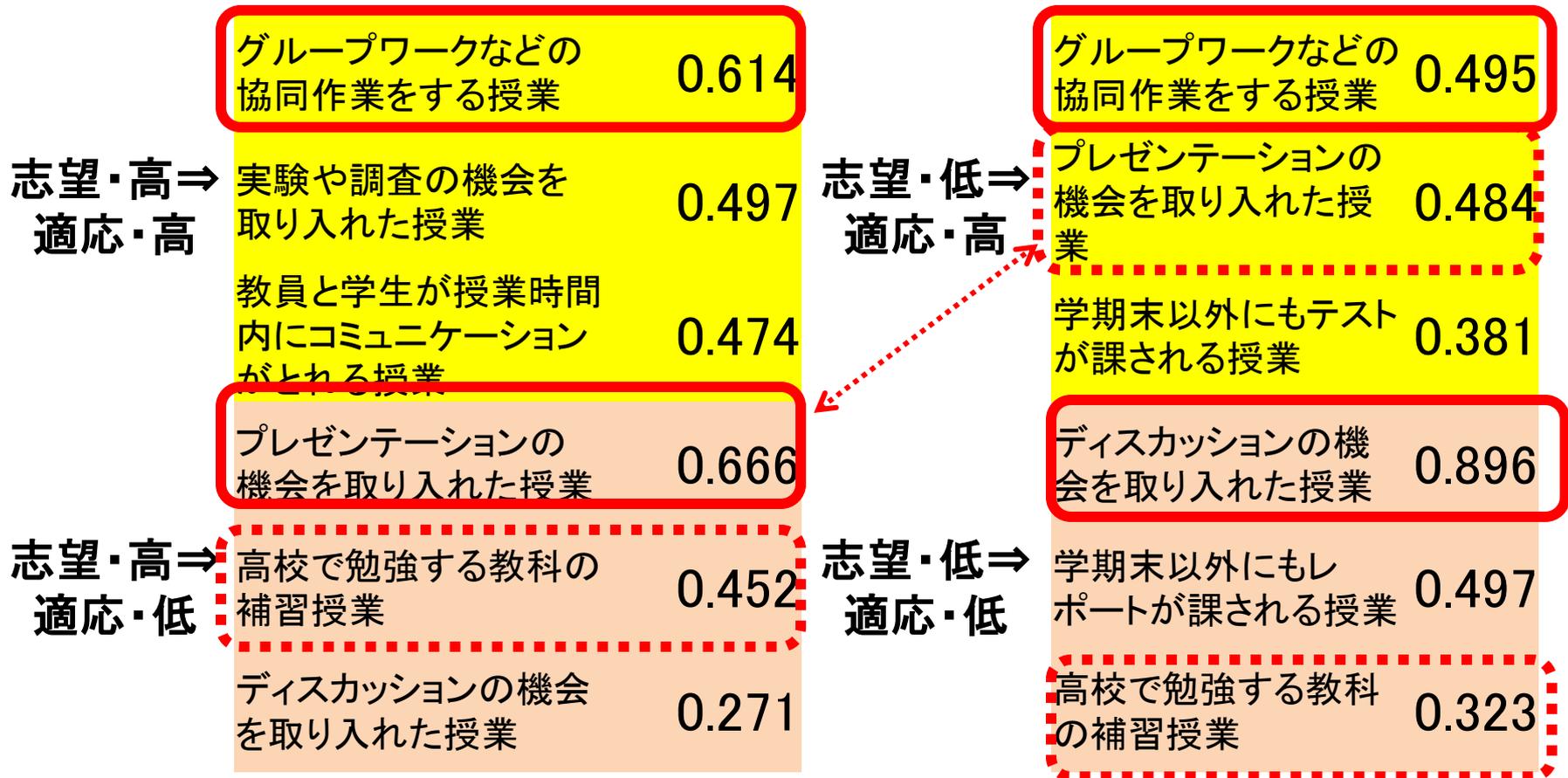
大学に適応しない学生は、次第に、活動、学習の関心が大学以外に向いていく。

志望・高⇒ 適応・高	サークルや部活動	0.495	志望・低⇒ 適応・高	大学の授業	0.670
	学校行事やイベント	0.398		学校行事やイベント	0.388
	大学の授業	0.362		社会活動(ボランティア、NPO活動などを含む)	0.189
志望・高⇒ 適応・低	社会活動(ボランティア、NPO活動など)	0.536	志望・低⇒ 適応・低	大学の授業以外の自主的な勉強	0.819
	大学の授業以外の自主的な勉強	0.453		趣味	0.227
	読書(マンガ、雑誌を除く)	0.282		読書(マンガ、雑誌を除く)	0.260

入学後の変化と関連ある要因の想定③

(説明変数; 入学後経験した授業)

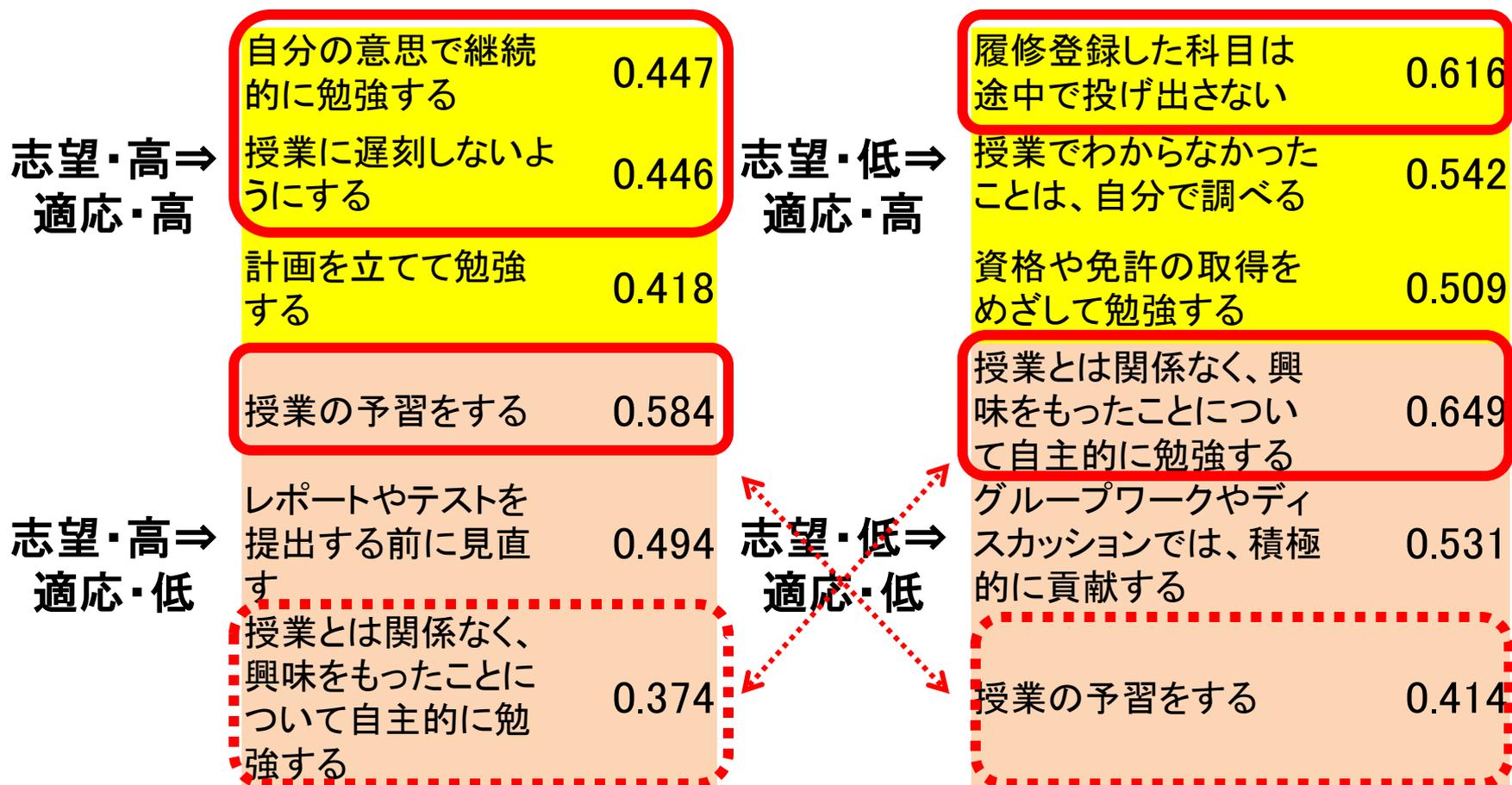
- グループワークは、学生の大学への適応を促進する。
- プレゼンやディスカッションは一部の学生には頭痛の種？



入学後の変化と関連ある要因の想定④

(説明変数; ふだんの学習努力)

• 大学から気持ち離れていく学生にとっては、自分のやりたい学びと授業の予習の両立は苦痛？



大学1年生定着のための課題

1 大学選択段階でのミスマッチの解消

- ・受験生にどのような情報を与え、大学の内容志向の主体的な選択を促すこと。
- ・これを入試方式の違いにあわせてどのように行うか。
- ・高校での進路指導の在り方が一層課題。

2 入学後の段階

- ・大学と離反しがちな学生の関心を如何に大学での学習・生活に向かわせるか。
- ・生活指導や、居場所づくりなど、包括支援はどこまで可能なのか？また行うべきか？

大学1年生定着のための課題

3 授業について分かったこと

- 共同作業は学生の満足度を高める。
- ただし、プレゼンやディスカスは苦手な学生にとっては阻害要因ともなる可能性がある。
- リメディアル、スタディスキルなどをいかに興味深いものとするか？